至誠沈勇

米内光政会会報　第三号



写真提供：盛岡市先人記念館

目　次

令和四年度（第三回）総会　……米内光政会編集部　……1

米内光政をめぐる人々Ⅲ　……平　野　ユキ子　……2

米内光政とその周辺③　―立派な顔に惚れた経済学者―　……米内光政会編集部　……10

ゆかりの地・品の紹介　……12

年次事業実施状況　……12

■令和四年度（第三回）総会

米内光政会編集部

米内光政会第三回総会は、令和四年十一月二十六日（土）盛岡市愛宕下の盛岡グランドホテルにおいて、会員67名の出席のもとに開催されました。

総会は司会の菊田隆盛岡市議会議員の開会宣言の後、藤井茂会長の挨拶、階猛衆議院議員、広瀬めぐみ参議院議員によるご祝辞、祝電の披露に続いて菊田議員の軽快な議事進行により滞りなく行われ、事務局からの令和四年度の決算報告、令和五年度の予算案、今後の活動予定について議案が提出され、承認されました。

今後の活動予定につきましては、追悼会の開催、第四回総会の開催、会報の発行が承認されました。

総会に引き続き、中野孝之助盛岡市議会議員の司会で、龍谷大学文学部・寺島泰伸講師による「米内光政内閣の再評価―米内内閣期の政策と新聞報道―」と題した基調講演が行われました。

近現代史における戦時内閣と米内光政の人物像にも迫る大変興味深い講演内容に、出席の皆様は興味深く聞き入り、講演時間一時間半はあっという間に感じられました。

最後に中野市議による閉会宣言にて閉会となりました。



第３回総会

■米内光政をめぐる人々　Ⅲ
――米内受政と佐久間勉艇長

平野　ユキ子

今回は、二人の人物について述べてみたいと思う。一人は、米内光政の実父である『米内受政（ながまさ）』について。もう一人は米内と同年で、同期に海軍に入隊した『佐久間勉（さくまつとむ）』艇長についてである。

さて、『至誠沈勇』第二号に、米内光政とその周辺②という文が掲載され、その冒頭に

…米内の母トミ（盛岡の松尾家）は、ほとんど一人で娘ヒサと息子光政を育てたも同然だった。早くから夫の受政（ながまさ）が出奔してしまい、盛岡にいなかったからである。

人望があった受政は、明治二十二年（一八八九）の市長選でトップになり初代市長に選ばれたが、横やりが入り心ならずもなれず、そのため受政は上京し発明の道に入ってしまったので、生活費を送ってくるはずもなかった。…

とある。

これはその通りで、私の実家である豊川家から米内家に養子に行った受政は、人助けが好きで、人の面倒をよく見る人だったので、人気があった。盛岡初の市長選に出て、一位当選を果たした。ところが、なんと時の県令が、受政が自由民権運動をやっていたことが気に入らず、この結果を反故にして次点の人を当選させてしまったのだと言う。今では考えられない事だが、当時はこんな乱暴なことがまかり通ったようである。

これでは受政は、盛岡にいられない状況に陥るのも当然であると思う。盛岡を離れて、一人で『発明の道』に入るのだが、しかし『発明』？

ちょっと常人には理解に苦しむであろう。

私自身、

『…受政は、愚にもつかぬ発明などに打ち込み、貧乏な米内家をさらに貧乏にして、気の毒にも米内光政は、借金の返済のために一国の宰相とは思われぬほど質素な生活を余儀なくされた…』などと聞いた（言われた）覚えがある。米内受政の身内である私は、その都度肩身の狭い思いを余儀なくされたものだ。

かつて私は父に、こうした事実（愚にもつかぬ発明…？）は本当なのかと聞いたことがあった。すると父は苦笑して「…受政は、米内家を興そうと思っていたのだがなぁ…。」…「しかし、結果的にはそうなるのだろうかなぁ…？」と、最後は寂しげに言葉少なく語ったことを覚えている。父は米内光政と同様に寡黙な人であり、言い訳がましいことは言わな

い人だった。その時はそれ以上聞くのをためらってしまったのだが、何故もっと詳しい事情を聞かなかったのかと、のちに悔やんだものだ。

盛岡に残されたトミが気丈な賢夫人で、二人の子供を一人で育てたのは事実である。

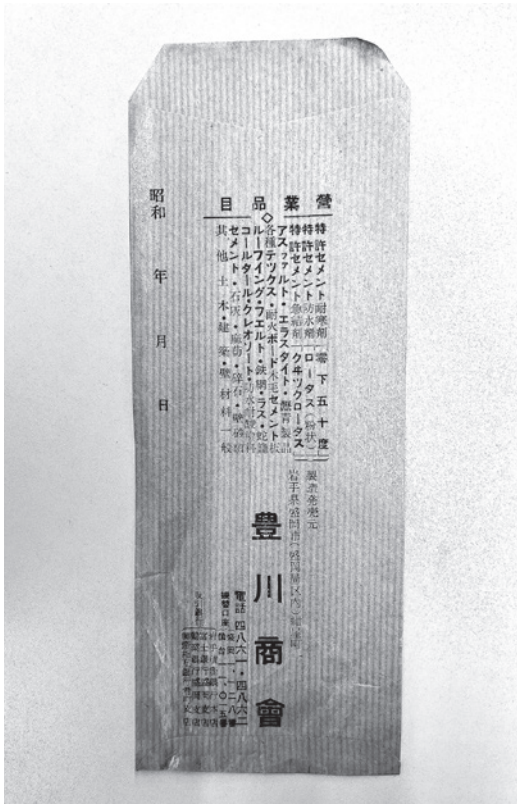
しかし、得票数はトップだったのに落選させられた受政の気持ちも察するに余りあるものがある。父の言った「…受政は米内家を興そうとしていた…」という事に引っかかるものを感じたのだが、ふと、私の育った豊川家のある事実を思い出した。

私の実家「豊川」は、かつては岩手県一の建築材料の問屋「豊川商会」を営んでいた。以前は北海道など県外まで手広く取引をしていたと聞いている。

私がふと思い出したのは、かつて実家にいた頃、常時目にしていた豊川商会の書類や封筒などに、営業品目として、様々な取り扱いの建材品目が並び書かれていた。その冒頭に常に、以下のことが明記されていたことだった。

特許セメント耐寒剤「零下五十度」
特許セメント防水剤「ロータス」（粉状）
特許セメント急結剤「クキックロータス」
製造販売元　豊川商会

実は、このことを子供ながら父に尋ねた記憶がよみがえったのだ。



豊川商会の封筒

父の答えは「その昔、そういう発明をして特許申請をしたところ、通ったのだ。製造してうちだけが販売していたんだよ」という事だった。

発明?!特許!!……ここに鍵があるのではないか!?

いったい誰が特許申請したのだろう。その発明とは何なのだろう。父亡き現在（いま）は、もう聞くことが出来ない。が、本当に特許を取っていたなら調べれば出てくるはずだ……。

私は、国会図書館に行って調べることにした。特許を調べるには、特許番号がわかっていれば良いが、それが解らなかったので、苦労した。「零下五十度」、「ロータス」、「クキックロータス」は商品名であり、特許名ではない。しかも戦前の特許であるから、いろいろな文献にあたり、何度も上

京のたびに国会図書館に通って、ついに特許の許諾書を発見した。

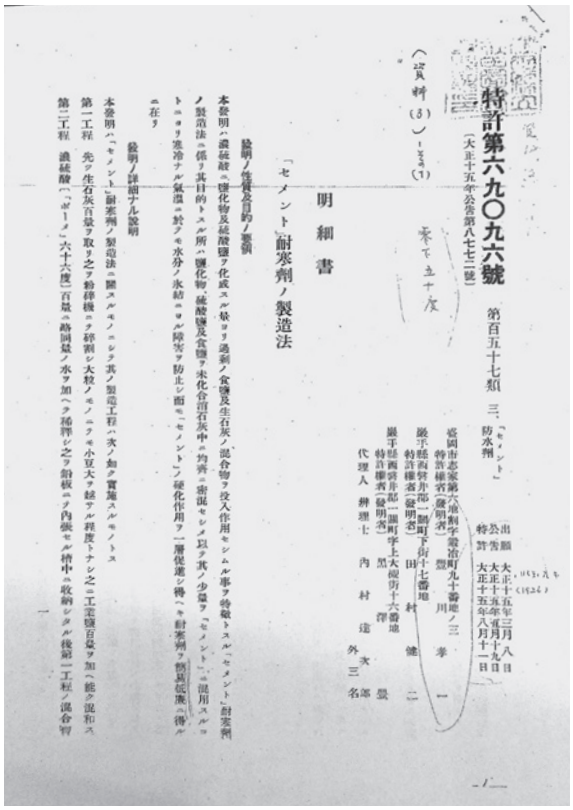
特許第六九〇九六號（大正十五年公告第八七八二號）

盛岡市志家第六地割字鍛冶町九十番地ノ三

特許權者（發明者）豊　川　孝　一

今は『紺屋町』と言うが、あのあたりの旧町名は『鍛冶(かじ)町(ちょう)』と言った。『豊川孝一』とは祖父の名前である。

これが、商品名が『ロータス』、『クキックロータス』、『零下五十度』、となった建築資材関連のセメント防水材、耐寒剤、並びにセメント急結剤の発明の特許に違いない‼しかも



特許許諾書

この特許許諾の九年後の大阪朝日新聞の朝日ビルの落成披露の記事も発見出来た。この記事には、特許製品の『ロータスなど』このビル建設に使用された製品の名前が出ている。そして施工は竹中工務店である。米内光政の三女の和子（私の叔母）は竹中工務店に嫁いでいる。関連があった証拠と言えるであろう。

やはり間違いはない…。豊川家は、竹中家と盆・暮れなどに礼物のやり取りをしていたことも思い出した。母が「…竹中さんから『鱧（はも）』が来たのだけど、こちらからは何にしようかしらね…。やはり極上の新巻きサケにしましょうかしら…。」など言っているのを漏れ聞いた記憶もよみがえった。

さて、この特許の発見の直後、コロナの蔓延で遠距離の移動が出来なくなったが、ここまでの調べで一応満足出来た。この発明者の「豊川孝一」とは父の父、私から見れば祖父と前述したが、受政の甥である。ここで、受政の『発明の道に入った』理由、『…米内家を興そうとしていたのだよ。』と言う父の言葉が生きてくる。

米内受政は、やみくもに発明の道に入ったわけではなく、身近に例があったわけだ。発明の申請者は甥の豊川孝一だが、発明の研究を始めたのはその父（痴疑雄）であるとすれば、なおの事。実の兄の研究を見ており、その後その息子が申請者となっていれば、発明の研究の道筋のあてもある、というものだ。すなわち受政の研究の対象は建築材料だったか

もしれない、と類推もできる。

先に提示した豊川商会の書類や封筒に印刷されていた特許取得による製造専売品「零下五十度」（耐寒剤）、「ロータス」（防水剤）、「クヰックロータス」（急結剤）を簡単に解説すると、これらの薬剤のお陰で寒冷地の冬場でも建設工事が可能になった、という事である。水は0度で凍るので、かつては冬場の建設工事は寒冷地ではできなかった。それが「零下五十度」というマイナス50度でも凍らない耐寒剤と「ロータス」、「クヰックロータス」のお陰で冬場でも工事が進捗するようになった。これは当時は画期的なことだったと思う。北海道にも販路を拡げていたということも頷ける話だ。まして戦前の日本は「満州」まで版図（はんと）を広げていた。極寒の満州でもこの発明は役立ったに違いない…！

何といっても豊川商会は、この発明による特許のお蔭で県下随一の建築資材の問屋となったのだから、身近で見ていた受政が発明に取り組もうと考えたとしても不思議ではない。

これは私の類推なのだが、賢夫人であるトミが、支え続けたというのはこういう理由があってこそではないか…？

余人が見れば、理解できぬ発明に打ち込むなど『愚にもつかぬ』と言う批判になったかもしれないが、受政や米内家にとっては、真っ当な理由があったと思うのだ。

第一、正当な選挙の結果をひっくり返されたら、とてもではないが居ても立っても居られない気持ちであろう。盛岡にはいられなくなるだろうし、何とか名誉を挽回して米内家を興して……、と言う気持ちになっても不思議ではない。それを分かっているからトミは苦労しても、夫の受政を支え続けたのではないだろうか。

トミは、余りに家計が苦しくて、「お父さんの発明研究を止めてもらいましょうか…？」と息子の米内光政に相談したことがあった。が、その時光政は「お金については私が何とかしましょう。」と、受政の発明・研究の道を閉ざすことをしなかったと聞く。それも父親の受政を思ってのことであろう。

遊蕩三昧（ゆうとうざんまい）で遊びに夢中になって財産を失くすのとはわけが違うと、受政を理解しての家族の在り方ではないかと拝察するのである。

米内受政のための弁明として、ここに書かせていただく。

さて、今回の「米内光政をめぐる人々」では、もう一人を扱う。

今回は米内と同じ海軍の「佐久間勉」である。

この方は、立派な軍人として戦前は修身の教科書にも出て教わったらしいのだが、戦後は軍人を扱うことは無くなったので、日本では知られることもなくなった。が、実は海外では今でも『人』としてのお手本として、教えられているという。軍人だからと、お手本にしないというのは何ともおかしなことではないかと私は思う。前回ご紹介した樋口季一郎も同じく、人として立派な行いをしたのだが、そのことを取り上げて紹介しないのはどんな理由があるのだろう。

佐久間勉は、一八七九年（明治一二）九月一三日生。米内光政は一八八〇年二月二日生なので、佐久間と同学年になる。海軍兵学校の二九期生で、米内光政とは同期生だった。

佐久間は一九〇三年に海軍少尉となり、巡洋艦「吾妻」に乗り組んで日露戦争を迎える。日本海開戦時には巡洋艦「笠置」に乗り組んでいる。日露戦争後はさらに経験を積み、最終階級は海軍大尉である。

事故は一九一〇年四月一五日に起きる。佐久間（当時三二才）を艇長とする『第六潜水艇』は、山口県新湊沖で半潜航訓練に臨んでいた。

ここで『潜水艇』について解説しておく。潜水艇は、のちに出る潜水艦の前身的な船である。当時の潜水艇は造船技術も未熟で、潜水艇として実用段階になっていない段階だったが、各国で実験的に訓練航行されていた。



佐久間勉艇長
（Wikipediaから転載）

実験的航行であるので、僚艦（りょうかん）と呼ばれる船舶がともに航行して見守ることになっていた。技術が未熟と述べたが、当時は潜水艇から外部への通信手段も無かった。

――事故が起きたのではないかと疑念が抱かれたのは、潜航してかなりの時間がたってからであった。

何らかの原因で、恐らく煙突から艦内に海水が流入し浮上できなくなったと思われる。海水が潜水艇内に入り込み、沈下してしまったのである。だが、僚艦はこれが訓練の一環かと誤認し、対応が遅れてしまったようなのだ。事故が発生したと明らかになったのは潜水艇が海底に沈み切って着底し、数時間たってからだった。艇内の空気は数時間しか持たない。潜水艇の位置の確認にも手間取り、救助はそれから丸々一日かかり、誰もが乗組員全員の事故死を感じていた。

当時は各国で実験的に訓練航行されていたと述べたが、実は、このような事故もまた各国で起きていた。救助が出来ればよいが、救助が間に合わない事も多く、海底から潜水艇を引き上げると、内部で何とか助かろうともがいていたことが如実にわかる乱れた状況や、助かるために我先に出口を争う跡などもあったり、まさしく乱れた状態で発見されるのが常だった。

事故発生から二日目にやっと引き上げられた第六潜水艇のハッチを開けた隊員は、内部を見て、感動のあまり思わず嗚

咽を漏らした……。

この事故の直前にイタリアでも同じような事故が発生しており、発見された艇内では文字通り阿鼻叫喚の地獄絵図、呼吸が出来なくなり苦しんで乱れた様子や、自分が何とか助かろうとお互いに争った様子が明らかに見て取れる、非情なる有様で発見されており、その状況を想像していた海兵隊員がハッチを開けると、

なんと佐久間艇長を始め、乗組員一四名全員が一糸の乱れもなく、一二名は定位置の椅子に居り、着座していない隊員二名はガソリンパイプの破損個所で死んでおり、最後まで自らの務めとして潜水艇を何とか修理しようと努めた様子で倒れていたのだ。取り乱した様子は微塵もなく、それぞれが皆、最後まで自分の務めを果たして亡くなったと分かる様子だった。全員の死亡原因は空気欠如による酸素欠乏だった。

そして艇長の佐久間大尉の遺書が発見された。

なんと刻々迫りくる『死』を目前に佐久間艇長は、事故発生の経過と、考えられるその原因などを克明に記録し、事故に対する自らの責任の謝罪と、乗り組員の残される家族の生活への配慮を願うことまで書いた冷静沈着なる遺書だった。

この冷静沈着な有様は、国内はもとより世界中へ伝わり人々の感動を巻き起こした。乗組員同士で争う事もなく最期まで潜水艇の修繕など、おのれの義務をそれぞれこなした様子は海兵隊のお手本として人々の感動を呼んだのである。

国内で報道されたこのニュースは、やがて全世界に広がった。各国から多くの弔電が寄せられた。アメリカでは米国議会議事堂には遺書が原文のままコピーされ英訳が付記されて丁重に陳列され、セオドア・ルーズベルトによって国立図書館の前に佐久間艇長の遺言を刻んだ銅板が設置され今も陳列されている。

イギリスの王室海軍潜水資料館に於いても今も佐久間と第六潜水艇の資料が展示され、お手本とすべき行いとして称賛されている。

以下に佐久間勉艇長の遺書の全文を記す。

「小官の不注意により陛下の艇を沈め部下を殺す、誠に申し訳なし、されど艇員一同、死に至るまで皆よくその職を守り、沈着に事を処せり、我れ等は国家のため職に倒れしといえども、ただただ遺憾とする所は、天下の士は之(これ)を誤り以(も)って将来潜水艇の発展に打撃を与うるに至らざるやを憂うるにあり」

「希(ねがわ)くは、諸君益々勉励以(も)って此(こ)の誤解なく、将来潜水艇の発展研究に全力を尽くされん事を。さすれば我れ等一つも遺憾とするところなし」

「沈没の原因。ガソリン潜航の際、過度探入せしため、ス

ルイスバルブを締めんとするも、途中チエン切れ、よって手にて之を閉めたるも後れ、後部に満水せり。約二五度の傾斜にて沈降せり」

「沈降後の状況。―、傾斜約仰角十三度位―、配電盤つかりたるため電灯消え、電纜（でんらん＝ケーブルの事）燃え、悪ガスを発生、呼吸に困難を感ぜり。

十四日午前十時頃沈没す、この悪ガスの下に手動ポンプにて排水につとむ」

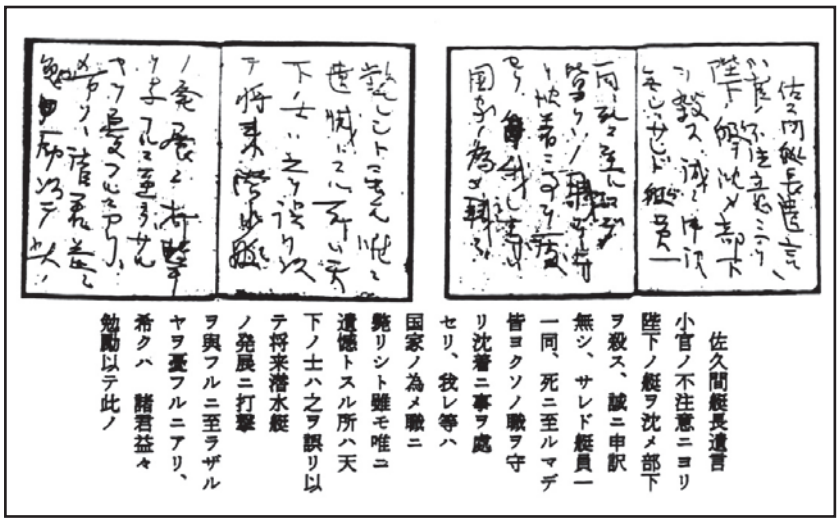
「―、沈下と共にメインタンクを排水せり。灯り消えゲージ見えざりとも、メインタンクは排水し終われるものと認む」

「電流は全く使用するにあたわず、電流は漏れるも少々、海水は入らず、クロリンガス発生せず、残気は五百ポンド位なり。ただただ頼むところは、手動ポンプあるのみ。ツリムは安全の為ヨビ浮量六百、モーターの時は二百位とせり。右十一時四十五分、司令塔の灯りにて記す」

「溢入の水に侵され、乗員大部衣湿ふ寒冷を感ず、余は常に潜水艇員は沈着細心の注意を要すると共に大胆に行動せざれば、その発展を望むべからず。細心の余り萎縮せざらん事を戒めたり。世の人はこの失敗をもってあるいは嘲笑するものあらん、されど我は前言の誤りなきを確信す。」

「―、司令塔の深度は五十二を示し、排水に努めども十二時までは底止して動かず、この辺深度は十尋（ひろ）位なれば、正しきものならん。―、潜水艇員士卒は、抜群中の抜群者より採用するを要す。かかるときに困る故、幸い本艇員は皆良くその職を尽くせり、満足に思ふ」

「我は家を出れば常に死を期す、されば遺言状は既に『カラサキ』引き出しの中にあり、（これ但し私事に関する事を言う必要なし、田口浅見兄よ、これを愚父に致されよ）



佐久間艇長遺言
小官ノ不注意ニヨリ陛下ノ艇ヲ沈メ部下ヲ殺ス、誠ニ申訳無シ、サレド艇員一同、死ニ至ルマデ皆ヨクソノ職ヲ守リ沈着ニ事ヲ処セリ、我レ等ハ国家ノ為メ職ニ斃リシト雖モ唯ニ遺憾トスル所ハ天下ノ士ハ之ヲ誤リ以テ将来潜水艇ノ発展ニ打撃ヲ與フルニ至ラザルヤヲ憂フルニアリ、希クハ諸君益々勉励以テ此ノ

遺書

「公遺言　謹んで陛下に申す。我が部下の遺族をして窮する者無からしめ給わらん事を、我が念頭に懸かるもの、これあるのみ。右の諸君によろしく。―、

斎藤大臣　―、島村中将　―、藤井中佐　―、名和少尉―、山下少将　―、成田少将　」「（気圧たかまり鼓膜破らるる如き感あり）―、小栗大佐　―、井出大佐　―、松村中佐（純一）　―、松村大佐（竜）、―、松村少佐（菊）（小生の兄なり）　―、船越大佐、　―、成田綱太郎先生　―、生田小金治先生」

「十二時三十分、呼吸非常に苦しい。ガソリンをブローアウトせししつもりなれども、ガソリンにようた。―、中野大佐　十二時四十分なり　……」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

米内光政会のこの会報誌は、「至誠沈勇」（＝この上なく誠実で、落ち着いた勇気のある様（さま））というが、これは米内光政の人柄を時の経済学者小泉信三が著わしたものとされ、そこから会報誌の題名を取った。（小泉信三の著わした額は盛岡市の円光寺にある。）

そして、日本海軍のモットーは、「至誠」であった、とされるので、日頃このような非常事態時に冷静沈着に対応するという訓練もされていたかもしれない。

とは言え、実際に事が起きたときにこのような冷静沈着に、「誠」の限りを尽くした行動をとれるのは、まさしく本当の勇気のある振る舞いといえよう。

佐久間勉第六潜水艇艇長もまた、「至誠沈勇」のひとであった……。

一九一〇年四月一五日　佐久間艇長以下乗り組員一四名全員殉職。

参考図書

『第六潜水艇』、『佐久間勉』…Wikipedia
潜水艦教育訓練隊【Submarine Training Center)】海上自衛隊潜水艦資料室より
『WEB歴史街道』四月一五日　第六潜水艇遭難
『BUSHOO! JAPAN（武将JAPAN)』潜水艇に閉じ込められた死の記録「佐久間勉と第六潜水艇沈没事故」
『第六潜水艇沈没事故と海軍の対応』日露戦争後の海軍拡張を巡る状況に関する一考察
山本政雄（防衛研究所紀要第7巻）
佐久間艇長の遺書、『第六潜水艇遭難　佐久間艇長の遺書』歴史街道他Webから引用。

※1　佐久間勉艇長の遺言の旧字体は現代字体に直してあるが、内容は原文のままである。

※2　なお、佐久間勉艇長の遺言の「現代語訳」も、やはりウェブ上にでている。検索して参考にしていただきたい。

※3　佐久間の遺言にあった通り、乗組員の残された家族には事故後、応分の弔慰金が天皇陛下より下賜された。

■米内光政とその周辺③　立派な顔に惚れた経済学者

慶応義塾大学の名塾長（戦前から戦後まで）として知られる経済学者に小泉信三がいる。マルクス主義を嫌いだったがゆえに、『資本論』を徹底的に研究し、マルクスに心酔する学者たちに立ち向かった戦闘的経済学者でもあった。

その小泉には、一つの面白い趣味があった。それは、立派な顔の男に惚れるというものだった。小泉自身が自分の顔にまんざらでもなかったこともあるが、自己に対する強い矜持があったからだと思われる。

そういう小泉だったから、新聞に毎日目を通しているとき、男性の顔に真っ先に目がいったのも当然のことだった。昭和十一年（一九三六）暮れ、その日も小泉は新聞を読もうと手に取ったのだが、真っ先にある男の写真にくぎ付けになった。戦艦の甲板上でゆったりとした面持ちで立っている一軍人にである。その人こそ、連合艦隊司令長官兼第一艦隊司令長官になったばかりの米内光政だった。

瞬間的に小泉は、「豊頬（ほうきょう）温顔のなんという立派な司令長官だろう！」と一目ぼれしてしまった。それ以後、小泉は米内に会いたいと願い、その機会を狙っていた。

その小泉が、米内と初めて会ったのは、山本五十六元帥の葬儀の直後だったというので、昭和十八年（一九四三）六月のことだった。銀座裏の「濱作」という料亭で、岩波茂雄（岩波書店創業者）の紹介だった。米内はズボン吊りのうえにチョッキなしの背広姿で現れた。

小泉の米内に対する第一印象は「体格は偉大、声は静かで太く、言語には少しばかり東北のアクセントがあり、全体の感じは、ゆったりとして相撲の年寄りというところであった」。その後、何度か小集を繰り返していくうちに、小泉はしだいにそして確実に、米内という人物に強い信頼をよせていった。



その小泉だが、昭和二十年（一九四五）五月の東京大空襲で顔に大やけどを負ってしまう。包帯を取ったとき、その見るも無残な自分の顔に、大いに落胆したようだ。

しかし、小泉の顔は、これ以後、少しずつ変化していった。そして、ついには、火傷を負う以前より立派な顔になった。精神が顔をつくった最高の例といえるだろう。それは、

米内の顔に惚れた小泉らしい変化であった。

そういう小泉の米内評は、次の言葉に尽きる。小泉が昭和二十四年（一九四九）一月号の雑誌『こころ』に、生前の米内（前年の四月に亡くなった）を思い出し書きつづった追悼文である。

「私は多くの日本人とともに、米内さんに対して敬意と好意とをいだき、晩年に近づいてからであったが、その人と知り合いになったことを一つの仕合わせと感じていたものである。終戦のときに示した決断と誠実なる行動とは、米内さんが我々の思っていたとおりの人であったことを実証したと思う。…日本人が今日ともかくもこうしていることに対し、感謝しなければならぬ人の一人として、米内さんのことを忘れてはなるまい」

だから、盛岡市の八幡宮境内の米内の銅像に、小泉が撰文を草していることも、うなずける。その文は、我々にじつに深い感慨を与える内容になっている。

「米内光政は盛岡の人…昭和二十年八月、太平洋戦争の終局に際し…一貫不動平和の聖断を奉じて克（よ）くわが国土と生民を、その破滅寸前に護ったことは、永く日本国民の忘れてはならぬところである。…至誠沈勇のこの人、今も世にあらばの感を新たにしつつ、この文を撰ぶ」

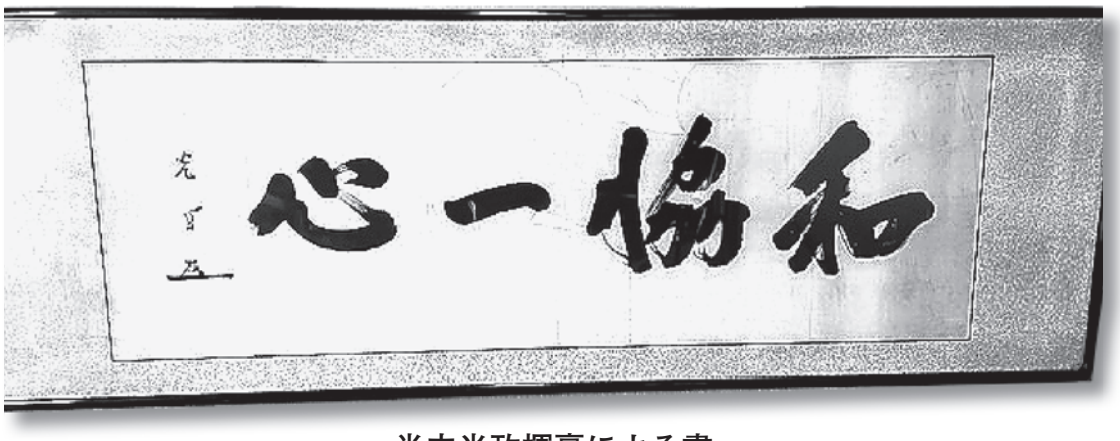
小泉の撰文は、我々に戦争と平和、人間の一生などというものを静かに考えさせてくれる。米内の真価が発揮されるような国の悲運に遭遇したことは、米内にとってじつに痛ましいといい、そのために彼の死が早められたとまで小泉は言う。

我々のほとんどが、誰に回想されるということもなく死んでいく存在であることを考えれば、剛直な学者・小泉信三にこれほどまでに思い出されるという一事をもってしても、感慨深いものがある。死後、おのれを知る者に思い出されるなど、稀有なことだからである。「死してなお生きる」という言葉を、あらためて考えさせられる二人の関係とも言える。

（この文は『いわて人物夜話』の「米内光政」の項を加筆訂正したものです）

（米内光政会編集部）

■ゆかりの地・品のご紹介



米内光政揮毫による書

■年次事業実施状況

二〇二二年　四月　十七日　円光寺墓参　左頁写真
二〇二二年十一月二十五日　役員会開催
二〇二二年十一月二十六日　第三回総会

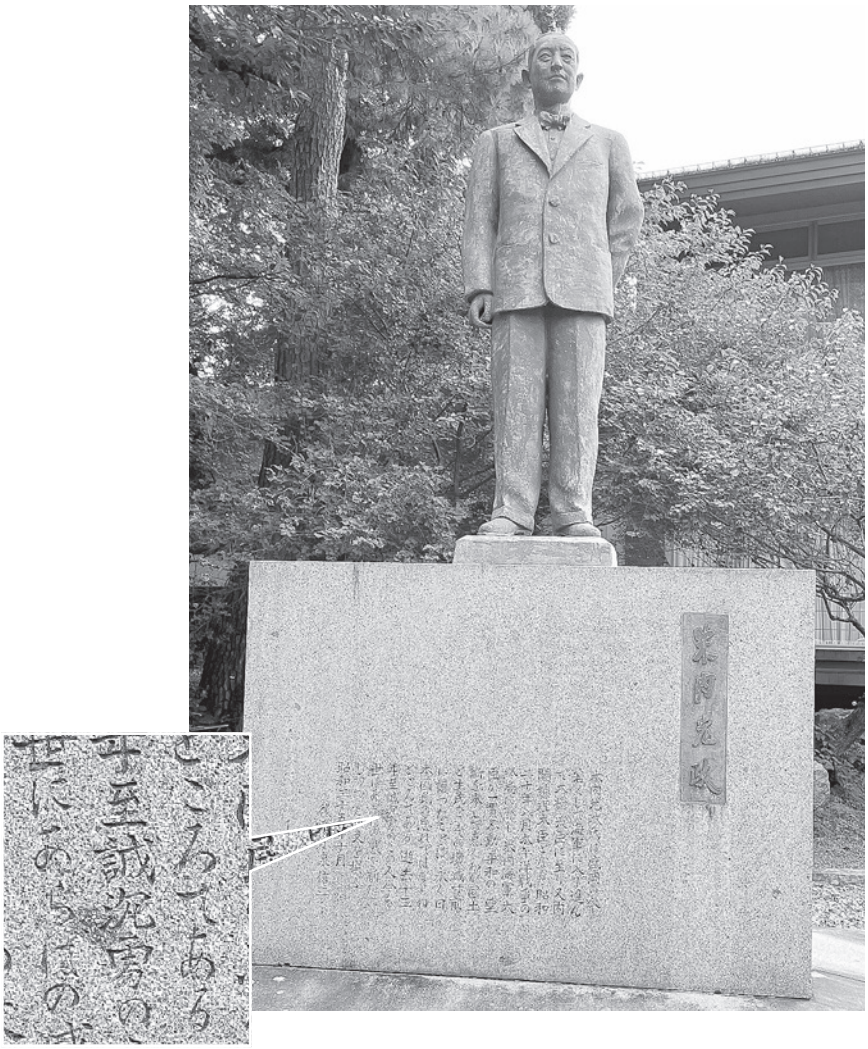




米内光政会役員他で円光寺を墓参

表題「至誠沈勇」について

「至誠沈勇」とは、「この上なく誠実で、落ち着いて勇気のある様」を意味する米内光政の人柄を表わしたもの。盛岡八幡宮境内にある崇敬殿前の米内光政像の台座に刻まれた経済学者（慶応義塾大学塾長）小泉信三による撰文より抜粋したもので、銅像の除幕式は昭和三十五年（一九六〇）十月十日に行われた。



米内光政会会報（三号）非売品

令和五年十二月十五日発行

発行所　米内光政会事務局

〒〇二〇―〇八八五

岩手県盛岡市紺屋町四―二十四

印刷所　河北印刷株式会社

盛岡市本町通二丁目八―七

令和５年１２月